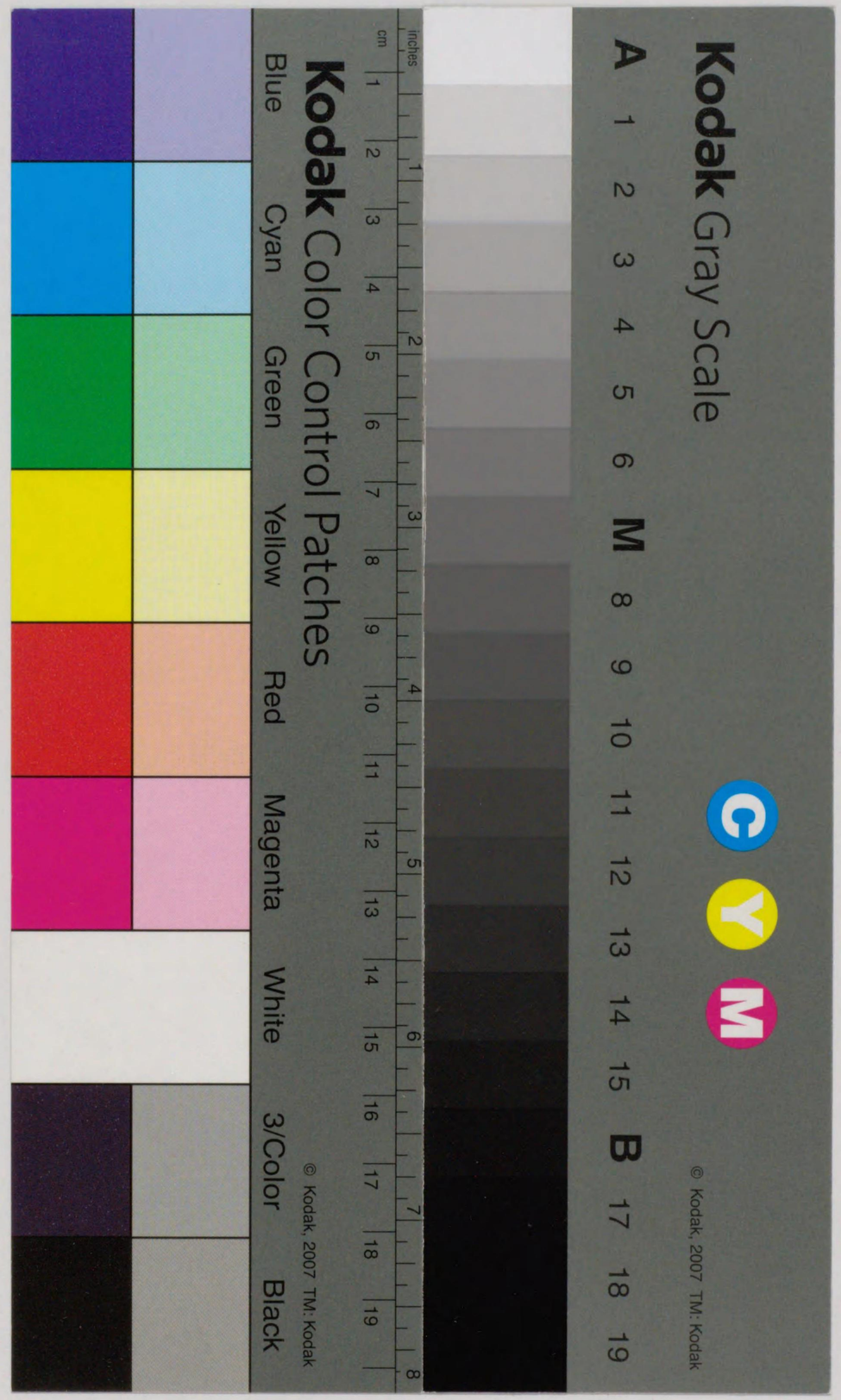
杞園白集

坤

163
128



枇杷園士朗先生

蔓白集

浪越　朱樹會

枇杷園句集卷之三

秋

初秋

ちり秋の川ばたよりてるかさてのぶし

独雲

松の葉にうす秋しるひとりうち

ちめくや秋半ば竹のぬけ雀

菴の戸へ拾ひ入るも桐一葉

宮内省圖書寮藏
昭正
15. 6. 22
内交

星夕
かも川や弟うりつくる星祭
その川紀のすゑをみそなを
小あゆ取
舟行
一さかに舟漕入色よてゝ川
灯籠
灯籠の油ちるゝ榎この車

露
檀溪
露にぬるあるゝ誰住ゝ家の煙
素外法師ゝむゝの追福の日
ありふれる黒ひおる人ゝハ
丹波のまゝ法師 蕉 津の
紀風ゝ
白露ふ元あつめまるおもひゝな

いなつまや孫ふすまとしを庭の松
山よりそびえて稲妻にゆる海の上
舟ゆくもなかるるところ
稲妻の光つく淀の塘の那
秋風
あきかぜや舟うと舟へゆくふす
秋風の吹をうしろ見るの月

須磨寺ハ戸を閉よりあきのゝ哉
悼松兄
むつまじきさゝ切りを師弟の中といへハ
あはしこゝろ此松兄ハ歩ふをへるゝ子のこゝろ
よて年ゆよハ乙もにて子ゝ老を拾てハ
先ゝよしきゝ乙ゝなるに乙ふ哉
なけきハ何ゝ子ゝ
秋風やけ共もなき　芭の句

朝貞

ひやうくわしに萩のさく垣ねうち
朝さうぬあさ貞ハ申し知なく
いくほとの世を萩のさかの枝
牧屋らしに萩見ゆる接ゑ引

萩

露萩やむすび捨る縄をゝれ
のそくまてもあかく萩の夕の申

ふきほふにこゝる萩の小庭引

桂五亭

ふきあとて玉習ふも居さう萩芝
萩ふ志ものれ芝ふふる西日引

萩

虹のねや笹ゆく海の萩の秀
ふとてもゆくりのふ萩の秀

まうすべし。

御つかひ

御つかひ

ゆめ

ゆめ

ゆめ

原

戸毒ふ者に日のある河原うあ
かちゝまやゝれそる一ちゝつ四或
十日ゆ小ゝ萩咲ゝきて戸の者
一ゝの代信鳥のまゝ孔ゆ四孔
三河の國根堂を詩ふ日
小舟に棹さゝて矣刻
川の下流ふあるふ河原

まゝ一ゝのあのうせいゆふゝれや
吉詣
原ゝ竹にゆ色あふの一ゝへゆ色先の
一ゝあゝゝれ健ふゆれ竹に
ゆれ健ふゆれ一ゝさふよゆれ
一ひゝうきゝの市やるゝにゝり
鶉
わうあゝ年おきれるひさる郭孔

略

寄られぬる夜ふけまで略もなりぬる

砧

小夜きぬた寒のひゝきあれく

小松吹伊賀小夜ふけの月

芙蓉

月雪くゝ芙蓉日くゝ花の露

月雪くゝに来るもあれた月を友

須广行

ひちゝ居雨の凄

寂れたあやゝ紀

小家にたゝと入る

面人ゝ夜八袖ふも寄す月の面

あくしへゆゝ芙とする晩

吹广すゝ懸るも月の名孤

あらしのよるの
月のくもりなく
空のかぎりを現ずるあるとき月夜式
ひやくしゅの月ふきあるホテルなる
家代や山ぶきうつるとなる月
松ケ枝をやどりて月よりなる
名月をいかめてさき月夜哉
月見とて神けを祈とる小橋哉

十五日山行

おかし人と同しつすしてあるとも
おもしろきあるハ二日三日
の月ぶとろうり例の人とかくしてハ
南陽う毎の住る露もる山の紫の菴を
とふ白雲跡をかくしてつゝ来
ゝもきとろものとなるとぶ今さあらう
思ひすりハとぶくて市中を去る

わづかに一里晴嵐変を成りうる
現に秋色多きとり入る木々の梢色
月をまつとてうつるの月あれ初るを
ことに嬉しく覚える
松やまを松よあてて月見うな
雨の日信濃よゆく人を急うます
嶮岨を雨よのぬれぬうの月
雨晴山月高

西山を洗ひ清める月雨式
中秋お一夕を月を待みてふく
十五夜雨ふく降風木をる
さうり吹あしうすれを揚す
降ああをなうあくうつの月
秋の雨をぬ雨てる志はし月雨ふ
白圓亭
古さとや老の寂まあにおる月

尊池亭

春もすゑ月みぬ侍るる菴ゝ那

山家に宿るる月のけしきおもしろ
ゆゑもとめくるも麻すをむすの袋
こゝろ風の新ちゝく来ゝるのあくるを
ゆふ月待をおくれ出るゝ月を
ゝゝ袋ふき春をあらしぬ

蘇月

春あけてもとゝ小ゝ色ゝ帰り

画賛

油をもゝ賞ふ花ゝけの燈も月花ゝ

贈伯先四十賀

千代の坂路の初をよハ雪も花ゝ

月のゝ月ハてるよゝ

おもゝ万年ゝるひとゝ月の秋

とゐりゐハもしる夏むう月のせと

硯静亭

いさよひや月ふちゆく蔦の奇

八月十日 鹿合にて

ゐるまてしるの

十六夜の雲にぬれ来る 鹿うな

井戸田小三郎

いさよひも月見る夜ゐふ

十三夜

梅川ゐ井田ゐ人も月見うな

長河紀行

ゐ也上人ハちゐもてと案も世人ゐハ引

ちゐゐゐおはし 引ゐわ住ゐ

ゐる山の菴のさいかしきとゐの郡社

四条ゐ辻に茄毛引ゐ住

ゐりてハ行徳を横ゐゐて外安

ちとよこてあたれ笑くかるくけ
あ丶ま丶疱瘡のあ少よのそおもひそるへき
ゆさふもあ丶すし山にそひ山よそひんの
さ法丶そるもやし三河の國よおかし
ふ丶しまるひとくをかそるひおてそこ
ゆ大樹寺ふて川ふれまにまつ時八九月
十二日ゆりの色又殿の山まひ山ふそる
あ月清浄遠宗ふ丶そるすく雲の

底よハ小寺をを湛へ白雲の頃よハ秋の
色をとめそるあり丶そ地ふれハ
とて好そる山居根の寺のゆにあるを
寺後丶ぬ
名をねそる月ちもとそ殿の又
秋来
秋の来や碧ちよりけそる法面

秋のおもしろさを思ひしられける
書かるにぞ十ひらばかりなる七ひら
よみてあるべしとあつらへきすれ
うちなびくこゝろもあくがれて
をなじ古へ人のいひふるし給ふる古言のこゝを
なぞらへ思ひやりてやまとことばの
うつりかはるなかにもうるはしき
西行法師の歌

さびしさまさるすまひ作らせ柴の戸
柴の戸はちりもはらはぬ
よもぎふのうらめしうもあるかな
山の奥にも鹿の鳴
なきすみよりとは誰人のおもふ
秋のうらみを
さしむかふ月にさそはれ
秋の夜をあかしかねぬる
山のおくかな

海さうの里

秋雨

秋峯の庵を
住もあらしさとことよろ秋の雨
こゝろもう浦を
秋のあゝとゝろくたゝはい入ぬ

彼岸

暮るの秋に豆まくひゝんゝあ

秋山

枯こゝすくしき松こゝをゆき秋の山
秋水
智る野秋毛ものも深よあきれあ

鹿

鹿老こゝす書ゝ書ゝ信花もあく花
ゆめハけもゝゝゆけハ鹿の寿
青空の山雪江ゝ菴よあこゝこゝ
門出て平ゆくひとゝ鹿の寿

桂さんが一人ぼっちで来た

十九日

朝から曇りがちで、どこへも行かない

白ちゃのーーー

西業

うへ寺まれハ小よ茂ーく雲霧

秋暮

西よ又る山のうるさよあきの雨

よハ月ゆ初やうするそ秋の雨

大蘇亭

日の雨ぬ日ハちけれとも秋の雨

栗山子

おりゝ石ひとハ有うるゆゝしハ

無題

枯蛉の十ちりたく枯枝ゆ

稲ま〻やゆよ梯クリの雨

先廉ゆうるゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ

私ゆさよ松雨よ菴の灯ハ云ハし

悼知東贈帯梅

あきそりの人の痩さへつれてゆく

八月八日の日接伴行上人を河の国へわたる
ゆとてひしめくやうて四十九院とゆふ
寺にはもゆふ寺の内をこれを殿堂八
あとゆふこゝろをもれ絵の上をすきてと
弘法ゆふて寺しくくなる
あとゆふ〳〵あきや接伴行の法の声
東次ぢみて
何をしこゝろひとゝゆふすて次ゆふ歌

九月十六日吉野の国
有東ゆふ河ゆふるゆて
月ゆて日みゆるに侍り　西園寺の中納言

卓池輯

枇杷園句集巻之四

冬

時雨

すぐ向時雨ぬるる雨ぬれあとのなく
雪ふるてしらあるるとうの鞋の跡

竹葉軒

さて外にさやく鶯ぬれ飛び
猛居や古人うやうの小菊ぬれ

芭蕉忌

世にふるハさらぬ身もセ哉の時雨

素堂蕉翁の善友なるを一日風雅
をもてなすの餞ハ草なるもて甲子
を悲しみ世の形見草なるもて甲子
吟行を惜しむ曰ハなるおもむきハ
秋去色の色ハ仰ぐ其の牡丹なるきるハ

隠士の句なれハなるほ紅ばまさるなるなる
執を景しるる手向草なる
月時雨さらなるハ
古きけしきなる
一ヒに秋ぞしられる須磨明石
山茶花に手をうけ水ハ時雨なる
茶室迎友
宮ゐるみなるやしろの松の月

和し氣に小鏡懸ける白ひうあ

東門公子と申奉る公子おはしまして
雪垣のみやびたる物くさりて古穫もの
あまたかつと中に一ひらを車の文字
に下さる此文字琵琶の上手成
なんあるとかるこそ見に異捌ぬふ
家のるありちうは此あるを多に考る中

以ふ琵琶造りとおしこうまのぶせうと
そうさの名なるものあるりとして人々に入
ぬと花のふ和をこのの一人多ひうにる
和ちりうり莊也を検校このの和の宗近
として四絃うきなるうしあるうに八
嘈に切ことあうをまして和をに
あをしみしこうの時雨も月もうきと
さこ二ひぬ

[illegible]

木枯

おらしやなさハ姫へ参る池の野
梅宮
ちらくて日もとかぬ苔の上
おらくしや日ふくく紅葉のしぐき
おらしやあ一さいよ市る月
紅代宇
宇治ゑ妻あるとゆうろてる思ひ

千鳥

生田嵐ひて紬のこさと時ちり
柿ちやハ二段のうちふも時ちり
五道亭
紅葉野ちゆけて枯ろ芦ちひ
大はふて
湖を野てゆ市る
おあけうな

冬月

あくまでも宗匠あるべきその月
さるまくふかく苔ふむべきその月夜哉
きるまくふかく降てあくるやみの月

大魚追悼

泣ハ父なるべしハるよかれ尾花

枯蓮

むつましく住やうふかまて立とる哉

詩仙堂帰路

丈山のさくもくれゆく枯野哉

訪野雀

かれしくやもとまたおのふ庵の犬

麦河ノ菴を訪ひて

こゝ見よかし霜の田芹を菴の宿

菊ふかくらひ月よちきゝ夫妻の枕元

五百生の石部仏しゆしやうの一夜の露をきえぬるそとうかをさまる家も此悲ひよ童子とそうの中にいるをしきみとうろ
れ弥仏るあるといまさきへハさて半てハ
あゆめ仏とゆふたうふ小たるて玉ちる
あ仏しの二実一ゆを見るうちちふる見
又ゆうきうれとせあるの中のちふ仏く
山映の二まや二まうこさ花ゆを

野沼のさゆしを弥ぶる家に
申く

雉も鳴く犬も吠ぬ春和山を引

氷

勝山を舟さしてセハ藤作引まれ
ゆる日を見す風あ〳〵雪さへ
降ぶるさきへを徹す
白浪のうけるハ氷る小さうな

冬木立

芭蕉翁百回忌

千向春陜

ちるこゝろもものせるとゝ冬木立

雪

まゝてに雪山見しよりうつる

さゝつ雪やく人のくれ来るひの木笠

曙やあぐらしめて雪に埋れうる

雪掃やつゝあとへ木立の情雀

さいつても雪ハ降ちるを奥山哉

月雪やこよひも月ハ雪の内

会云

笠ふるあるも会にさいるを花もさそう

浜市ちなを

あともなきこゝ庭さめの友と陣市と

南無月夜雪に雪附る陣市と

東暮

年の尚さに苔むしたる日未衰水
のふかのゆく末に湖水あり猫ヶ洞と
名ふ藤竹おほちこ溪水を引とる其
上におつ池塘尾笹枯て雪のごとく
鳧鴨彩波水底に清し見より
路を西にとまとふ苔踏中に廣く
ホ云るして武蔵国を遍る見渡いさや年の

国意よりて苔某のきり松遠原
やうのまの引ちり云る

ゆくとしの廿九日もろの日ち南
ハ十ちしむ月の一日ちきの三五
ゆ暮雨苍の大人まいさをれて共に
ろ日をしまよ行にあけ柳にふ
ちかゆをまる月雪ゆのさりて
おもハまもも亦意に巡めるを来る一年

始終を雲よりもせるすいとめてさく
小ゝ感あるを

野秀真

隙まもなや佑のうるる萩のうけ
伸く小ゝのこゝろもせぬ山あ弘
三丁もなやゝ小松らも未る日市走
六ゝの言を我を見る
小ゝられぬ雲角力のあゝ乙ふ

苅月一夏のあるに乙ふの日も
既よりしゝもなや一瓢の
酒の弱をもくあく歩ふ
瓢雪ゝる　少ゝられぬ
鈴　おさへゝる

蕉雨輯

枇杷園句集巻之五

雜

倉澤

ふるもみてゝ馮月ら四十の賀ゑ

ゝ孝山ゝ孝ゝ

大きゝ堤ゝ

住つひゝ

海人のゑ等の朝の干潟にゐれ者ゝ
少未拾ひあゝるきたるゝ物ゝ以ゝち
未小ゝ小ゝ風芦をさしゝゝ帰ゝり
さて多ゝ潟ゝ有るよ海ゝとおゝとある
潟のゝくゝ小ゝ海ゝゝに立あゝるゝ
多ゝゝ鳥の鳴ゆゝゝ幾千代をゝゝ
あゝんを以ゝめてゝ

宵時やこのゝゝるゝゝゝと和ゝの浦
大黒賛
花よ貴よ四時時うゝゝのゝの日影
多春園の桜見もさもゝふゝゝゝる
ゝゝひ侍る泉石のゝゝハ中さに柳
木を植るゝゝゝゝゝゝゝ植さもゝふ
七日の日早き桜ハちゝと浮ひて行のけしき

さたくおもしろしうれ谷の上
漕出て宇治に帰る気色の景色もおもひ
やられて笑ふ曹おなじ舟とは
きゝ侍れとこゝろもゆきもとまらす
あつまさきの五六人こゝろはいきるとしの
さくら木深き所にゆ山ひとの傳雲
岡ゆ所ゆ
胡上傳雲雲雲雲在花深雲

暮下傳雲雲花深雲未去
花津晩色
東京三千百峰晩雲中彩
出芙蓉芙蓉白雪千秋色
入家林照古雲
平曲會式
床頭置琵琶二面
彈中或弦彩則頭設一面

急此代之
曲中禁忌談笑吸烟管歩
唾壺必蕉有意元曲調
者貴飲鴉々々則說書
人中世浪了
嘗孔夢こ面やうに月の光
何の此時より夢とりて連歌

あをたさしるに岩去る水のたるみ
ふるさとりうの白菜毎朝ちらしく
おほせハとうの枝に雲か枝を
歩入さるうるもとめ孤へ見あり見
るまこと
曲終不収撥更唱祝世之句
拳壺助言
出てふきみ曲終る

撥を弦のうちにたもち

脱袴

把盃

洋嶽在心形素己忘蕩然

山頽亦復不妨

瓢次兵庫

秋便うとうしうるみつうう不用の戈を

ぬぎすて自然をぬぎのしまも瓢有あるあ

の是に一口をひきあへ居然としてこ

急有用ゆ扨ゆくある赤人の草西行の

庵の高芝こ行芭蕉性の旅の及古こ

大師の凡京芭蕉はなあの高々雪越人う

風雅の藻典まこももみあ入れた

きふに便うとうしこの磊磊串う瓢然し

て云て曰わう自然をうしうりわう

自然を失へり爲ぜして曰炭を
ちらハ何とらハ
何とらハきん曰蹴し米をちらハ何と
いきん曰ちるを又ぜして曰宋をちらも
何を自然をうし爲んや飄然と
しうの歌て曰
鴉く様をつきれさる酔
同し虚の藻塗草 虚飄

鴉く様をつきれさる酔
同しちらしのぬる 虚飄
おくし おきや冬の波 虚飄

松兄輯

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

163
128

163
2
128